

現代の家族の姿とそのゆくえ

天理大学人間学部教授
石飛 和彦 Kazuhiko Isitobi

0：はじめに—社会学から見る「家族」

今回は、現代の「家族」について考えていくうえで社会学が提供できる最も基本的な概念のひとつ、「近代家族」というものをてがかりに考察します。

1：3つの時代—伝統的社会／近代社会／ポスト近代社会

社会学が社会を歴史的にとらえようとするときには、おおまかに〈伝統的社会／近代社会／ポスト近代社会〉という3つの時代に区分するのが通例です。

「伝統的社会」とは、江戸時代までの「ムラ社会」のようなもので、農村社会あるいは共同体社会という性格を持ちます。それは「個」の存在しない社会であって、ひとびとは「しがらみ」や「身分」のなかに絡め取られながら生きて死んでいく。

「近代社会」は、ごく大まかには「19世紀以降」、あるいは日本では「明治以降」の社会です。それまで小さなムラの中で完結していたひとびとの生は、「近代国家」という大きい枠組みの中にあらためて位置づけられることとなります—学校教育制度しかり、資本主義的な産業構造とくに企業社会しかり、福祉国家的な社会福祉制度しかり……。そのような枠組みの中で、人々は、生まれ、学校教育を受け、就職し、社会生活を営み、老いて死んでいく。そのようにしてはじめて、「ムラ社会」には存在しなかったような近代的な個人主義、「しがらみ」や「身分」に縛られずに自分の力で切り開いていく、一人ひとりの人間のかげがえのない「人生」というものが、成立します。そして、およそ19世紀にはじまったそのような「近代社会」は、基本的には現在の私たちのこの社会にまでつながっていると考えられます。

しかし同時に、私たちは現在、そうした「近代社会」の仕組みがそろそろ限界を迎え、おそらく別の仕組みの社会システムが立ち上がりつつあると感じています。社会学は、そのような訪れつつある社会を「ポスト近代社会」と呼んでいます。

2：3つの「家族」—伝統的「家族」／「近代家族」／ポスト近代家族

そのような区分に対応して、「家族」を〈伝統的「家族」／「近代家族」／ポスト近代家族〉と分けることができます。中でも特に「近代家族」は、現在の私たちにとっては「あたりまえ」に見えながら、じつはきわめて特殊な形態をとるものとして、「近代」にはじめて誕生したものです。「近代」がはじまり、ムラを離れた男女は都会で新しい出会いを経験します。ムラのしがらみや家産の重さから解放された一家系と家計からの解放—互いの愛情だけの結びつきが成立します。そしてそこから子どもが生まれ、いわゆる「核家族」すなわち「夫婦とその子どもからなる家族」という形態が成立するわけです。夫は都市型のサラリーマン＝賃金労働者になり、自宅とは別の職場に通勤して働きます（職住分離）。他方、妻は「専業主婦」として「家事」を行い、また夫と子どもにケアと愛情を注ぐこととなります（「主婦」や「家事」はこのように近代的な都市型の賃労働と近代家族の成立によってはじめて誕生します＝「性別役割分業」）。また、このように家庭内で子どもに愛情を注ぐようなやりかたが広がることで、「多産多死」の社会から「少産少死」の社会

へと転換し、子どもはいつでも愛情をもって生まれるべき「かけがえのない存在」になります。こうして、家庭はいよいよ「夫婦と親子の暖かい「愛情」の場」となり、私たちがあたりまえだと感じている「近代家族」ができあがる、というしだいです。



3：現代の家族の姿とそのゆくえ

しかし、データを見ていくと、そのような「近代家族」にも、陰りが見え始めています。まず、世界的な経済成長のかげりによって、「性別役割分業」がもたなくなり再び「共働き」が増加しています。それどころか、若い人たちは収入が安定せず、家族を形成できなくなる、つまり婚姻率や出生率が低下しています。少子高齢化が進み、また離婚率も上昇することで、若年と高齢者の双方で単身世帯が増加し、世帯の形態も多様化しています。「夫婦と子ども2人からなる核家族」を「モデル世帯」とするような社会制度設計はもはやなりたなくなりつつあります。つまり、近代社会システムとともに生み出された「近代家族」ユニットは、社会システムの変動—「ポスト近代社会」への移行—とともに、社会システムそのものから見放されつつある、ということです。

ここで注意すべき点が2点あります。第一に、私たちは（少なくとも部分的には）すでにこの新しいシステムに適応しつつあります。家族で一緒に行動する時間は減少しつつあるのに多くの人がそれで十分と感じており、また三世同居より「近居」が望まれている。従来の「近代家族」の実質的な機能を低下させた「家族」はいまや、社会的ネットワークの数ある結節点のひとつへと変貌しつつあります。そして第二に—それにもかかわらず—「あたたかいこころのつながりとしての家族」という「イメージ」だけが肥大しつつあるようにも見えます。そして、社会システムが大きな変容を遂げるために起こる様々な矛盾や軋轢を、あたかも「家族」の「イメージ」が、つごうよく覆い隠しているのではないかと、とも見えるのです。もしそうなら、私たちは、「家族」のイメージに惑わされず、来たるべき社会システムのありようをきちんと見定めなくてはなりません。

この、社会システムの変化をふまえたうえで、私たちはどうすればいいのか？ —というのが、社会学からみた「現代の家族の姿とこれからのゆくえ（課題）」です。

